豊穣の女神が母性を爆発させた話

蛙飛び込む沼の中

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ギルガメッシュの娘に一目惚れしたイシュタルがその娘を養育するハートフルなお話。

※二、三年前にサイトで書いていたものをリメイクしています。

※ｐｉｘｉｖにも投稿予定です。

※諸々許せる方のみお読みください。

目次

番外編
番外編1 ―― 1
番外編2 ―― 8
本編
第一話 ―― 14
第二話 ―― 22
第三話 ―― 28
第四話 ―― 33
第五話 ―― 38

番外編

番外編１

「イシュタルさまとお父さまの気配がしたから来ました。よろしくおねがいします、マスター！」

　元気の良い声にそう言われて、私、藤丸立香は面喰らった。今日はなんか行ける気がする！　と召喚室に飛び込み熱い思いのままに召喚を行なった結果が目の前にいる少女、もとい幼女。笑顔を浮かべたその顔貌はとても可愛らしく、成長すればとんでもない美人になることだろう。

「うん、よろしくね！　私は藤丸立香。隣にいるのがマシュ。えっと、あなたのクラスと真名を教えてもらってもいいかな？」

「……覚えてない？　それともまだ知らない？　……えっとね、真名はメラム、クラスはアーチャー。イシュタルさまとお父さまと同じなんだよ！」

　名前を尋ねると少しきょとんとしていたが、すぐにまた笑顔を見せて名乗ってくれた幼女にひとまず安堵する。幼い姿で現界していても中身までそうであるとは限らないのが英霊だ。サーヴァントである以上本人に実感があるかは別にしても記憶は晩年のものまで有しているはずで、子供扱いされることに不快感を示すこともある。

　申し訳ないことに神話に詳しくないため名前を聞いてもピンと来ないが、そこは隣にいるマシュがフォローしてくれると信じて幼女が放ったイシュタルとお父さまという言葉を思い出す。先日召喚に応じてくれた古代メソポタミア神話に登場する女神はわかるが、お父さまとは一体誰だろう。

「……そういえばギルガメッシュに顔似てるよね？」

「に、似ているのも当然です。メラムさんはギルガメッシュさんの実の娘であり、イシュタルさんに養育された方ですので……」

「王様の娘!?　じゃあいつもイシュタルが愛し子って言ってる子ってこと？」

「マスター、早くイシュタルさまとお父さまに会いたいです！」
そう言いながら白色のモコモコが足下に飛び付いてくる。触れるべき点が多過ぎて今までスルーしていたが、この子はなぜ羊の着ぐるみを纏っているのだろう。頭は髪の毛まで着ぐるみのフードに覆われていて見えているのは顔面のみ。ギルガメッシュそっくりの整った顔立ちに子供特有の無邪気さが併さってとても可愛い。そして抱き付かれたからわかるがこの着ぐるみ、極上の手触りだ。我慢ならずふわふわの子羊を撫で回してしまった。
「めちゃくちゃ肌触りがいい……」
「せ、先輩……あっ、申し遅れました、デミサーヴァントのマシュ・キリエライトです」
「……抱っこ！」
「え？　えっ？」
するりとマシュの足下へと移動し、小さな両手（蹄まで再現されている）をマシュに向ける子羊。戸惑うマシュに構わずグイグイとアピールする姿も可愛らしい。足下で動くもこもこの魅力には抗えず、マシュはおそるおそる子羊を抱き上げた。
「わ……柔らかい……！」
子羊を抱き上げたマシュが瞳を輝かせながら言う。なお子羊はマシュの胸に遠慮なく甘えていた。幼女でなければ大問題だった。
ごろごろと喉を鳴らす子羊を抱えたマシュと連れ立って召喚室を出る。イシュタルとギルガメッシュに早く会いたいというメラムのリクエストに応えるためだ。二人ともどこにいるかなと一瞬考えて、しかしその必要がないことをすぐに悟った。近付いてくる大きな物音と悲鳴。廊下にいる人たちに多大な迷惑を掛けながら、マアンナに乗って全力疾走してきたらしい女神イシュタルが暴風と共にやってきた。
「メラム！」
「イシュタルさま――お母さま！」
「ああ、メラム！　本当に貴女なのね。私の愛しい愛しい子……またこうして会えるなんて……」

イシュタルにいち早く気付いたメラムが嬉しそうに腕を伸ばす。イシュタルは瞳を潤ませながらマシュからメラムを受け取り、強く抱き締めた。カルデアにいるイシュタルは聖杯に縁深い人間の中で相性の良い少女を依代に現界しているため生前の姿とは違うだろうに、メラムは一切の迷いも躊躇もなくイシュタルの腕の中で破顔している。

邪魔するのは悪いだろうとマシュに目配せをして立ち去ろうとすると、他ならぬイシュタルがそれを止める。メラムの額に優しく口付けを落とすと視線を私たちに向けた。

「お礼を言うわ、マスター。この子を召喚してくれてありがとう。ほら、メラムも」

「マスター、ありがとう！」

「ううん、こちらこそ召喚に応じてくれてありがとう」

あのイシュタルが素直にお礼を言うなんて、と驚きつつも返事を返す。いつもならこんな態度をしていたら噛み付いてくるイシュタルだが今は目の前の愛娘に夢中のようで何のお咎めもなかった。いつもこの調子ならいいのになぁと思った、その時だった。

「可愛いメラム。さあ、私の部屋に行……」

「フハハハハ！　メラムよ、父が来てやったぞ！　さあ我が腕に飛び込んで来るが良い！」

「パパ！」

「「パパ!?」」

まさかの呼び名にイシュタルと同時に叫ぶ。突然湧いた情報に頭がついていかない。まさかあのギルガメッシュがそんな呼び方をされ、イシュタルの腕の中からその手（蹄）を伸ばすくらい懐かれているなんて。

一瞬の隙をついてギルガメッシュがイシュタルから娘を奪い取る。イシュタルも大層驚愕していたのだろう。そうでなければ愛娘を抱き締める手が緩むことはなかったはずだ。

「パパ、肩車してください！」

「ふ、天に仰ぎ見るべき我を見下ろすことを望むとは。斯様な蛮行を

赦すのはお前くらいなものよ」
　高笑いしながら娘の要望通りに肩車をする古代メソポタミアの英雄王（半裸ｖｅｒ）。その姿に私とマシュはもちろんイシュタルさえも絶句し惚けていた。そっくりな顔の父娘の笑い声が響く中、とんでもないサーヴァントを召喚したことだけを理解した。
「な、なんでギルガメッシュのことをパパって呼んでるの？」
　ギルガメッシュの肩に乗せてもらいご機嫌な様子の子羊に尋ねる。イシュタルはどれだけ衝撃を受けたのか立ち上がることができないほど落ち込んでいて、天の女主人に膝をつけさせることのできる幼女に驚愕するほかない。ギルガメッシュは娘を肩車しながらそんなイシュタルを鼻で笑っていた。
「？　パパはパパだよ？」
「そうだけど、ほら、昔はそういう呼び方しなかったんじゃないかなって……というかさっきはお父さまって呼んでたよね」
「人に説明するときはちゃんとしないとダメってシドゥリが……」
　先ほどのは人に説明するときの敬称的な意味のお父さまだったという。カルデアにいるどのサーヴァントよりも幼く見えるがさすがはギルガメッシュの娘ということだろうか。
　しかし、それでも現代で使われるパパ呼びには疑問が残る。私の表情を察したらしい子羊は説明を続けた。
「えっとね、ここじゃない聖杯戦争で会った時にパパって呼んでいいって言われたから」
「聖杯戦争!?」
　落ち込んでいたはずのイシュタルが悲鳴を上げてギルガメッシュの肩から子羊を奪い去る。速い。ギルガメッシュも反応しきれないほどのスピードとはさすがイシュタルである。超スピードで強奪された子羊もびっくりしたのかきょとんとしている。宇宙猫顔の子羊だ。可愛い。
「どうしてそんな危ないところに行ったの！　聖杯戦争なんて危険がいっぱいなのよ!?」
「イシュタルが……まともなことを言って怒ってる……!?」

「先輩！」
マシュに横槍を入れるなと注意されてしまった。ごめん、つい。
詳しくは覚えていないと首を振る子羊がイシュタルの顔をまじまじと見つめる。やがて花が咲くようにパアッと笑い、頭をイシュタルの首元に擦り付けて甘え出した。
「我で運を使い果たしたかと思っていたが我が娘をも召喚するとは。存外やるではないか、雑種」
「お、お褒めに預かり光栄です？」
「あやつには我の宝物庫の使用権限を貸し与えている。そこな駄女神からも財宝や武器を譲り受けているらしいな。駄女神と違い有り余る財を持っており、戦い方も我を真似ているぞ。まったく愛い奴よ」
いつになく機嫌が良く饒舌な王がベラベラ語り出す。娘が来て嬉しいようだ。
王曰く、王律鍵のスペアを渡しているためよく宝物庫からかっこいい武器を持っていくらしい。誰に影響されたのか射出するのは武器より宝石の方が多いとのこと。あとは宝物庫から出した武器や強力な魔術礼装（今の着ぐるみではないらしい。見たければ再臨させろと言われた）を用いての肉弾戦（体当たり）が好きらしい。見た目とは裏腹にアクティブな子羊である。イシュタルはギルガメッシュの言葉を信じられないと言いたげな表情で聞いていた。
「戦いなんてさせられるわけないでしょ!?　何考えてるのよギルガメッシュ！」
イシュタルが言うことも尤もだ。サーヴァントにも向き不向きはあるし、戦闘に対する心持ちも異なる。ありがたいことに多くの英霊が力を貸してくれているので今は全員が全員戦いに出る必要はない。カルデアでできることだってたくさんあるし、幼い子どもを戦闘に加えることに抵抗感もある。だが、そんな私たちの心配をギルガメッシュは鼻で笑って吹き飛ばした。
「我の娘の愛らしさは本物だが、貴様らのそれは杞憂だ。己が目でメラムのステータスを確認しておけ。だが雑種、我が娘を戦闘に出す時は我を呼ぶことを忘れるなよ」

そう言ってギルガメッシュは去っていった。色々と混乱しているイシュタルからメラムが離れる様子がないからだろうか。
「……マシュ、あとでメラムのことが書いてある分かりやすい本貸して？」
傍若無人を地で行く二人が愛する存在。顔を合わせれば喧嘩をする二人が比較的大人しく会話していたのはこの子の存在があったからに違いない。
わかりましたと力強い返事をくれた後輩に目配せし、イシュタルのことはメラムに任せてその場を後にした。

ギルガメッシュの言う通り、メラムは高水準のステータスを有していた。本人も戦うことを嫌がる様子はなく周回にもよく付いてきてくれる。イシュタルから借りたというシタとミトゥムを振り回して暴れる姿に、アーチャーの状態ではこの二つの武器を扱えないイシュタルよりも有能なのではとエルキドゥは言っていた。しかしどれだけ強くても心配だと言うイシュタルと一緒に遊びたいらしいギルガメッシュの目を盗んで付いてくるのだけはやめてほしい。私の命が危ない。
そんなメラムに種火を渡し、素材を揃え、ついに第三再臨を行う日がやってきた。その空気は緊迫している。メラムは楽しそうなのだがイシュタルの雰囲気がやばい。
「メラム、準備はいい？」
「はい！」
その理由はひとつ。召喚直後のメラムは羊の着ぐるみを全身に纏っていた。そして次の再臨時はなんとギルガメッシュの鎧を真似た姿を見せてくれた。そう、つまりイシュタルがめちゃくちゃ嫉妬しているのだ。
「じゃあ、行くよ」
イシュタルの服装を真似てほしいと思う反面、幼女にあの格好をさせるのはあまりにもよくない。イシュタルが怒らない感じの衣装に

なってくれと願いながら素材を渡した。
——そうして現れたのは。
「……」
「マスター！　見て見て！」
「金色の……羊？　あ、これもすごいふわふわしてる……」
足元で嬉しそうにするメラムを撫でる。白い子羊が金色の子羊になっただけのはずだが、イシュタルの目が怖い。キレて大声で叫ばないのはメラムのためなのだろうが完全に怒っている気配が伝わってくる。
「……可愛い私のメラム？　ちょっと耳を塞いでてくれる？」
「？　はい、お母さま」
「で、マスターはメラムを抱えて万一にも耳から手を離さないようにしてなさい」
「ア、ハイ」
女神こわっ。目が笑ってない女神こわっ！
言われた通りに耳を塞ぐメラムを抱えて、さらにマシュに頼んで念のためメラムの手（やっぱり蹄だった）を抑えてもらう。そんな私たちの姿を確認し、イシュタルは大きく息を吸い込んだ。
「私の愛し子に何しやがったのよドゥムジィィイーーーーー!!!!!」
神話上の夫の名を叫びながら怒るイシュタルを宥めるのは、特異点を解決するレベルで大変だったとだけ言っておく。

番外編2

「ばあば、だっこ！」
「……はぁ、仕方ないですね」
　気怠げに広げられた腕の中に子羊が勢いよく飛び込んだ。私が堕落させたいのはあなたじゃないんですけどー、なんて言いながらも子羊を抱き上げる手付きが優しくて思わず笑ってしまう。しかしそれを見逃してくれなかった彼女は鋭い目付きで私を睨んできた。
「……その生温い視線はなんですか？」
「孫に甘々なおばあちゃんだなって」
「どこがですか⁉」
「むしろどこが違うのってレベル」
　抱き着けるようにしゃがんであげたり、甘えてくるのを受け入れたり、落ちないし万一落ちても平気だろうにしっかり抱えてあげたり、膝に乗せて子守唄を歌ってたり。どこからどう見ても可愛がっている。
「ちょっと⁉　最後のいつ見たんですか⁉」
「最後に見たのは一昨日かな。けど毎日のようにしてるよね？」
「な、なんで知って……いえ、私は愛欲の神。堕落の魔王。そうやって甘やかすのも堕落させるためであって」
「メラムはカーマちゃんのこと好き？」
「ばあば大好き！」
「んん〝ッ……コホン、つまりこの子はもう私に堕ちているわけです。堕落させることが目的ですが私は慈悲深いので堕落したからといって見捨てることはしませんし何ならもっと甘やかすのも吝かではないというかいえ全然可愛くなんて思ってないですしあの金星駄女神から引き離したいとかも考えてないですけど」
「黒髭並みの早口」
「ばあばどうしたの？　疲れてる？　メラム降りる？」
「この魔王が子ども一人持てないとでも？　不敬ですよ。そのままでいなさい」

「あんまり孫甘やかしちゃダメだよおばあちゃん」
「甘やかしてないですー！　堕落させてるんですー！」
　ところでお気付きだろうか。甘やかしているという部分は過剰なまでに否定するカーマちゃんだが、おばあちゃんという呼称を否定していないことに。
　この呼び方が定着したのはカーマちゃんがカルデアに来てすぐのことだった。

＊　＊　＊　＊　＊

「あ、カーマ」
「あら、マスターさんじゃないですか。……ふぅん、抱えているのが噂の神に愛呪われた子ですか。ほーんと可哀想。女神なんて古今東西ロクな存在じゃないものに愛されるなんて。あ、もちろん私以外のことですよ？」
　私の腕の中で寝ているメラムを見てカーマが嗤う。友好的ではない視線を向けられたせいか眠っている子羊が少し身じろいだ。
「ま、私には関係のないことですけど。今の私の標的はマスターさんなわけですし？」
　愛欲の神でありながら愛を嫌悪するカーマが酷薄な笑みを浮かべて私に視線を向ける。あ、嫌な予感、と反射的に後ずさるのと子羊がパチリと目を覚ましたのは同時だった。
　ん～、と唸りながら私の肩に額を擦り付けたあと、寝起きでぼんやりとした赤い瞳がカーマを捉える。女神の愛し子が自分を見てどう反応するかを見たいのか、はたまた自分がどういう感情を抱くのかを知りたいのか。カーマの興味は既に私からメラムに移っていた。元は男神だが依代が女性のため女神？になっているカーマ。人を堕落させる魔王と視線を交わして、メラムは寝起きとは思えないほど元気よく叫んだ。
「ぼあぼ！」
「……は？」
　宇宙の概念を得ているカーマがスラング的意味合いで宇宙を背

負っている姿を見たのはこれが初めてだった。
「カーマはばあばなの？」
「うん！」
「良かったねカーマ。メラムのおばあちゃんはビーストⅡ（ティアマト）以来だよ」
「でもじいじでもある」
「本来は男神だもんね。でもおじいちゃんは結構いるからおばあちゃんでいいんじゃない？」
「何の話してるんですか貴方たち!?」
　理解不能と騒ぐカーマを不思議そうに見つめるメラムの頭を撫でる。おばあちゃん元気だねと言うとメラムはニコニコ笑って頷き、カーマは余計に騒ぎだした。
「インドの神を祖父母と呼ぶとか頭バーサーカーなんじゃないですか、この子！」
「メラムの両親は増えるものだから祖父母も増えるでしょ」
「増えないですよ!?　というか両親が増えるってなんです!?」
「ジェネリックママはメソポタミア関係じゃないサーヴァントしかいないし」
「ジェネリックママ……？」
　本格的に宇宙を背負い出したカーマを見て、そういえば両親は増えないことが普通だと思い至った。メラムがほいほいママを増やすせいでいつの間にか感覚が麻痺していたらしい。ちなみにジェネリックママとはカルデア内での俗称であってメラム自身はきちんと相手のことをママやお母さまと呼んでいる。イシュタルに近い神性や能力を持つサーヴァントは軒並み認定されていて、一等懐いているのはBBちゃんだ。
「ばあば大丈夫？　具合悪いの？」
「いや祖母扱いしないでくれます？　他の女神はあなたに特別な関心を向けるようですが私にその魅了は効かないようですし。私を苛立たせる子どもなんて簡単に黙らせ――げぇ!?」
「――なんと非道な神なのでしょう。幼子が祖父母を求め慕う気持ちを踏み躙り、あまつさえ暴力で脅すなど。これが愛の神とは……なん

ともはや……」
「キアラさん？」
「はい。見知った獣の……いえ、お会いしたことのない神の気配が致しまして。不肖殺生院キアラ、後学のためにお会いしに来た次第でございます、が」
　言葉を区切り、やれやれと首を振るキアラさんをカーマは苦虫を噛み潰したような顔で睨み付ける。今にも舌打ちが聞こえてきそうだし、雰囲気がより一層ギスギスしだした。
「斯様な幼子に暴言暴力を振るうなど、カルデアでは許されませんよ？」
「貴方が言います、それ？　……あーあ、シラけちゃいました。私はこれで……わっ!?」
　この場を去ろうと足を進めたカーマの右肩に私の腕から抜け出したメラムがしがみつく。急に飛び付かれたカーマが少しよろめいて（油断していたとはいえ飛びついただけで女神をよろめかせる子羊のやばさは見ない振りをする）非難染みた視線を原因に向けるが、そのまま言葉が続くことはなかった。
　う～、と。顔をしわくちゃにしてキアラさんに対して唸るメラムがそこにいたからだ。
「メラム、どうし――」
「このおばさんきらい!!」
　キアラさんは微笑みを浮かべたまま、カーマは呆けた表情のまま場が凍る。聞かなかったことにして逃げ出したい。自分が放つ暴言や失言より子どもがやらかす方がよほど心労が大きいことを痛感した。
　それにしても、と現実逃避を兼ねて考える。この表情は前にも見たことがあった。エレシュキガルに対してだ。冥界の女主人にもこんな感じで唸って暴れて大変だった。けれど、エレシュキガルはイシュタル（母親）を殺した前科があると考えれば理解できるが、なぜキアラさんにも唸っているのだろう……？
「……ふ、ふふっ」
「か、カーマ？」

「いいですね、とても良いです。そうですよねぇ、こんなオバサンは嫌ですよねえ」
「やだ!!」
「ふ……ッ、ええ、それじゃあ〝ばあば〟と遊びましょうか。今、とっても気分が良いので甘やかしてあげますよ」
「えっ……」
「その幼児性愛者を見る目やめてくれます？　愛の形は様々とはいえ、私という神でも受け入れ難いものはあるんですけど」
マスターとして子羊の安全は守ってみせる。
最強の守護者（マタチ）もいるが、一つでも選択肢を間違えたらこっちの方が危ないことになる予感がするので、その点においては心底嫌そうな顔をしているカーマの方が信頼できるかもしれない。
「うわ……まあたしかにバーサーカーとかになったらやばそうですね。可愛くて食べちゃいたいを物理的にも性的にもやりそうで」
「笑えない冗談はやめて？」
「母親から子への愛って拗らせると最大級に面倒なんですよねー」
「ばあば……？」
「はーい、ばあばですよー。さ、なぜか固まってるオバサンは放ってマスターの部屋にでも行きましょうか。失礼しますね、お・ば・さ・ん??」
嘲りをたっぷり含んだ声で、とても楽しそうにカーマは言い放った。

＊　＊　＊　＊　＊

「最初はめちゃくちゃ打算的だったのに今じゃすっかり孫に甘いおばあちゃんになって」
「なってません」
「でもメラムがパールヴァティーを威嚇したときニヤけてたよね？」
「あれは愛されて当然って顔をしているあの女が可愛がってる幼女に威嚇されたことが単にいい気味だったからです」
「ああなったのはカーマちゃんがシヴァに殺されたって知ってからだ

し、知ってからは他のシヴァ関係者にも威嚇してるけど、その度にニヤけてるよね？」
「しーてーまーせーんー」
そう言いつつもメラムをあやす手付きは明らかに手慣れている。最近は一緒にお風呂も入っているらしい。言うまでもなくママたちとカーマちゃんの仲は最悪です。
「ばあば～」
「はいはい。マスターさんもこれくらい素直に甘えてくれれば可愛げがあるんですけどね」
「可愛いって認めちゃってるよ」
「……」
すりすりと頬を寄せてくるメラムを受け入れたカーマちゃんが視線を逸らす。その耳は若干赤い。
二人きりだと猫吸いならぬ子羊吸いをしていることもメラムに確認済みだし、もはや堕落しているのはカーマちゃんもではと思うが、賢明な私はこれ以上追究することはやめておいた。

本編

第一話

子どものすすり泣く声が聞こえて、イシュタルはふと振り返った。
愛人にしてやろうと都市神自ら求婚したやったというのに逡巡する間もなく袖にしたあの男。自尊心を傷つけられた怒りと屈辱から殺してやろうと試みたものの業腹なことにやり返され、ならばと金目の物を奪いにジグラットにやってきた。突然のイシュタルの登場に慌てふためく兵士や神官を無視して王不在だというそこを調べたが腹の立つことに金目の物はあまりなかった。ウルクは天の女主人たるイシュタルのものであるからして、ジグラットにある国の財産ではなくギルガメッシュの私財がほしいのだ。これほど探してもないとなると何処かに隠しているに違いない。本当に腹が立つ、とイシュタルは舌打ちした。父神に頼んでウルクを半壊させてやろうかとさえ思う。ジグラットを破壊しながら散策するのも飽きたし疲れたし、と不愉快そうに眉を顰めつつも帰ろうとしたその時に、その声は聞こえてきた。

「……？」

ジグラットにいる子どもとなればギルガメッシュの子だろうか。イシュタル程ではないがギルガメッシュにも多くの愛人がいる。ああも好色であれば子がいてもおかしくはない。
けれど、とイシュタルは首をかしげた。今いる場所は薄暗く埃っぽい。とてもではないがギルガメッシュの子や寵姫がいるような場所ではない。ギルガメッシュの怒りにでも触れたのか、しかしあの男は子どもにはさほど苛烈ではなかったはず、と好奇心に駆られてその声のする方向へ向かう。兵士や神官はイシュタルの理不尽に巻き込まれる前に逃げているので邪魔が入ることはない。

「――あなたは」

「だれ……？」

泣き声がする部屋に踏み入ると泣いている幼子が目に入った。そ

の姿を見てイシュタルは思わず目を見張る。自分と同じ神の徴である金髪と赤目を有した、ギルガメッシュそっくりの女の子。その幼子が恐らくは母親であろう遺体に縋って泣いていた。
「それ、あなたの母親？」
　こくりと幼子が小さく頷いた。
「死んだ人間は蘇らないわよ」
「……」
　イシュタルの言葉に幼子が俯く。まだ乳飲み子でもおかしくない体躯だというのに死というものを理解し、礼儀も弁えているようだった。神の徴を有していることを考えればそれも当たり前か、とイシュタルが驚くことはなかった。半神とはいえ人間よりも優秀なことはギルガメッシュの幼少期からもよく分かる。
「あなた、随分やつれているわね。ちゃんとご飯は食べてる？」
「……たべたくないです。おかあさまのところ、いきたい」
　ふるふると首を横に振って幼子はそう言った。冷たくなった母親の手を握り続け、もうイシュタルには見向きもしていない。不敬な態度だがイシュタルは気にしなかった。
「それにしてもあの金ピカそっくりね。娘でしょ？　金髪赤目の娘がいたなんて聞いた事はないけれど」
「おかあさまが、いっちゃだめって」
「うん？」
「かみとめのいろがちがうから……おうさまとおなじだからそとにでないようにと」
「まあ、たしかに騒ぎにはなったでしょうけど」
　黒髪黒目がメソポタミアの人間の特徴だ。イシュタルやギルガメッシュのような金髪赤目はメソポタミア文明では神の力を示している。ギルガメッシュから神の力を持つ子が産まれたとなれば慶事として大々的に祝われそうなものだが、なぜこの母親はそうしなかったのかとイシュタルは不思議に思った。
「おかあさまは、おうさまがおきらいでした」
「まぁ、神にも人にも好かれる性格はしていないわね」

「わたしはおうさまそっくりだそうで、いつもふくざつそうなおかおをしていました」
「……」
母親はギルガメッシュを嫌い、自分にも愛憎の入り混じった感情を抱いていたがそれでも愛してくれていたと娘はイシュタルに言った。神であるイシュタルに人間の機微などわからないし母親本人もすでに死んでいて真相は知りようもない。だが、娘の口振りはまるでそうあってほしいと願いを込めたもののように聞こえた。
魔術の心得があった女は出産に立ち会った者たちの記憶を改竄したという。神の徴を持つ王女などいない――死産であったとし、自らは子を喪い狂った母親の振りをして人々を遠ざけた。初めてできた友人と遊ぶことに忙しいギルガメッシュはその報告を聞いても直接見舞うことすらせず、女官を通して静養を言い渡しただけだった。その後は逃げ出す機会を探っていたが幼い娘を隠したままとなると難しく、やがて女の体は病に蝕まれていった。そこまで語ると娘は大粒の涙を零し始めた。
「わたしがいたせいで……」
「それは違うでしょ」
気づけばイシュタルは娘を抱き上げていた。驚いたのか娘の瞳から流れる涙が止まる。
腕の中の幼子を観察する。服は大人が着古したものを子どもの丈に合うように雑に切られており、洗えば美しくなるであろう金糸の髪はまるで泥でも塗られたかのように所々黒く汚れていた。
「あなたの母親の行動もどうかと思うけど、一番悪いのはどう考えたって金ピカ王……あなたの父親よ。愛人とその子どもも養えないとか甲斐性なしにも程があるわ」
「……おうさまは、わるいひとなのですか？」
「ええ、それはもう、最っ高に趣味が悪い馬鹿王よ」
すり、と指で頬を撫でると幼児らしい柔らかい弾力が返ってくる。ひどくやつれ憔悴しているが今ならまだ間に合うだろう。
「あなた、名前は？」

「……」
幼子が俯く。一瞬見えた瞳は哀しみに満ちていて、イシュタルはそれ以上何も言わず娘の頭を撫でた。
親の確執のせいで存在を隠され、純粋な愛情にも無縁で、名すら与えられず。ただの人間の幼子であれば理解できなかっただろうに、半神半人である娘はすべてを察してしまっていた。
「なら、私が付けてあげる」
「え……？」
「私があなたに名前をあげる。これからは私と暮らしましょう」
幼子の目が見開かれる。声も出ないで驚いている顔にイシュタルは微笑んだ。
神の血を濃く継いでいる娘。自分に恥をかかせた男からそれを奪えば大層な嫌がらせになるだろう。今は薄汚れているが顔立ちも整っているし、恩を売って飼ってみるのもいいかもしれないと思った。当然ながらイシュタルの精神は神のそれであり人とは異なる。娘の身の上を知っても義憤に駆られることもなければ同情も憐憫も大して感じない。可哀想に思うところもあるがそれは人が路傍に捨てられている愛玩動物に向けるような感情に近い。――そのはず、だった。
「なまえ……」
此処へ来てから初めて聞こえた嬉しそうな声にイシュタルは興味を持った。呆然としていた表情はやがてイシュタルへと向き直り、満面の笑顔とともに娘が言葉を発する。
「ありがとう、ございます」
ぴしり、とイシュタルの体が固まった。
「――か」
「か？」
「かわいいっ！」
そう叫んで、イシュタルはより力を込めて娘を抱き締めた。そのまま頬同士を擦り合わせ、擽ったそうにその行為を受け入れる幼子の姿にイシュタルは胸を抑える。天の女主人が初めて萌えを感じた瞬間

だった。
「美の女神である私を笑顔ひとつで虜にするなんて……かわいい～……」
「かわいい？」
「ええ、可愛い。ずっと私がお世話してあげるからね」
　女神であるイシュタルの対魔力は非常に高い。たとえ幼子に魅了の能力があったとしてもすでに効果は解けているが、それでも一向に愛情が薄れる気配はない。ここまで愛おしいのは元からあった愛情が一気に覚醒したからだろう。あんなに汚れた姿なのに嫌悪感など感じず一目見たときから気になっていたことが良い証拠だ。
「そうと決まったら早速私の神殿に行きましょう。早くしないとうるさいのが来そうだし」
「でも、おかあさま……」
「ああ……」
　イシュタルの目がすっと細くなる。剣呑な目で幼子の母親を見つめる瞳には嫉妬の色を宿していた。
　この子の保護者は――母親はイシュタルのみであるべきなのだ。愛憎を抱えていた生母とは違う、ただひたすらに暖かな愛情だけでこの子を包もう。そうイシュタルは心を決めた。そのためには、その女は邪魔だった。
「死んだ人間は生き返らないと言ったでしょう？」
「でも……わたしの、ゆいいつの……」
「――イシュタル様！」
「……げ、シドゥリじゃない」
　もし幼子が言葉を続けていれば母親の体はこの世から完全に消え去っていただろう。しかし闖入者のおかげで冷たさを増したイシュタルの瞳はそちらに逸らされた。
「イシュタル様、この騒ぎは何事でっ……その娘は？」
「あなたたちが見落とし続け、顧みることもなかった王女みたいね」
「な……!?」
　シドゥリの目が見開かれる。見知らぬ人間からの視線に怯えた娘

がイシュタルにしがみつく手に力を込めたが、安心させるように微笑んだイシュタルがその手を撫でる様子を見てシドゥリはさらに驚いた。
「大丈夫、この人間はシドゥリ。神に仕える神官よ。私の愛し子に不敬を働く人間ではないわ」
「しんかん……？」
「ええ。そうよね、シドゥリ？」
「は、はい。イシュタル様の寵児に、いえ、王の娘に失礼な態度でした。申し訳ございません」
　頭を下げるシドゥリに幼子が狼狽える。どうしたらいいのか分からないと戸惑う様子を見てイシュタルは代わりにシドゥリに頭を上げるように告げた。
「突然大人に頭を下げられて驚いちゃったのね。本来なら傅かれることが当たり前の立場なのに」
「イシュタル様、その方は……」
「今から私の子よ。名前もこれから決める。それじゃあね」
「お、お待ちください！　せめて王女の身元の確認を……！」
「そこにいる女が母親らしいわ。それで充分でしょ」
「し、しかし……」
「いしゅたる、さま」
「うん？　なぁに？」
　おそるおそると幼子がイシュタルとシドゥリの会話に言葉を挟んだ。舌足らずに自分の名を呼ばれた嬉しさで自然と笑顔になってイシュタルが応える。堪らないとばかりに頬に口付ける姿にはさすがのシドゥリも固まった。
「まだ、わたしはここにいます」
「……どうして？」
「こまってるから……」
　幼子がシドゥリを見てそう告げた。また生母の話題か、と釣り上がりかけていた眦がみるみる緩んでいく。
「ああ、可愛い。なんていじらしいの。本当にかわいい子」

愛しさをそのまま言葉にしたような賛辞がイシュタルから発せられていく。そこに嘘も偽りもないことを感じて幼子は照れたように笑い、シドゥリはより頭を混乱させた。
「ねえ見てシドゥリ。この愛らしさ。この愛嬌。ウルク、いえメソポタミアの中でもこの子の可愛さに勝てるものは存在しないわ」
「そ、そうですね」
詰まりながらもシドゥリが答える。イシュタルの態度に思うところはあるが王女を可愛いと思ったのは本当だ。
だからこそ、余計にこの愛らしい王女が表社会に出ていなかったことに疑問が募る。既に息絶えている女性の顔には僅かに見覚えがあるがどこの誰かまではシドゥリにはわからない。いずれにせよ調査は急務だ。シドゥリはイシュタルの機嫌を損ねないようにしながら、同時にどうにか王そっくりの王女の身柄も保護したいと考えた。
「……仕方ないわねぇ、貴女の優しさに免じて許してあげる。すぐにまた迎えに来るからね、私の愛しい子」
「イシュタル様……」
「そういうことだからよろしくね、シドゥリ。貴女が面倒を見るように」
「は、はい。では王女、こちらへ……」
イシュタルの気が変わらないうちに、とシドゥリが幼子に手を伸ばす。しかし幼子はその手を怖がるように身を竦ませ、イシュタルのほうへ体を寄せた。その動作にイシュタルの目尻がいよいよ締まりのないものに変わっていく。
「そんなにも可愛いことをされたら離したくなくなってしまうわ。このまま連れ去って食べてしまいたいくらい可愛い」
「……こわくない？」
「シドゥリは大丈夫よ。お手本のような神官だもの。よもや私の愛し子を、これ以上不幸にするなんてことは有り得ないわ。そうよね？」
「はい、それはもちろん。王女のご身分に相応しい扱いをさせていただきます」
「ね？　私もすぐ迎えにくるから」

あやすようなイシュタルの優しい声音と微笑を撫でる手付きに幼子も安心したように微笑んだ。イシュタルの腕から降り、自分の脚元に恐々と歩み寄る王女にシドゥリは視線を合わせるために跪く。
「御身の安全は私が保証いたします。ご安心ください」
「それじゃあ後はよろしく、シドゥリ。私はこの子を迎えるために神殿を整えておくから、早急に引き渡すようにね」
「……は。急ぎ王に報告いたします」
シドゥリが飛び込んできたことで他にも兵士や侍女が周辺をうろつく気配がする。もはや取り繕えないが、ここであの馬鹿王がやってきても面倒だと思いイシュタルは素直にジグラットから立ち去った。去り際の幼子の不安そうな顔にはかつてないほど胸が締め付けられたが、シドゥリに抱かれながら健気に頭を下げる姿を無下にするわけにもいかない。
「またね、私の娘」
そう言い残して急いでマアンナに飛び乗った。行くときとは正反対の心持ちで帰途につきながら、気まぐれな女神はウルク中に聞こえるように声を張り上げた。
――ギルガメッシュの娘をよこせ、でなければウルクを破壊する。
意味が分からず呆然とするウルク民を置き去りにして、イシュタルは湧き上がる喜びを隠そうともせず自らの神殿へと飛び去った。

第二話

「ギルガメッシュの娘を寄越しなさい。差し出さないならウルクを滅ぼしてやるんだから――！」

いつもの女神の癇癪だろう、とギルガメッシュは思っていた。マアンナで市街中を駆け回りながら叫ぶ女神イシュタルの騒々しい声に、ギルガメッシュは眉を寄せて苛立つ心のまま声を荒げた。

「喧しいぞ駄女神が！　毎度毎度、奴には手を焼かされる……！」

「落ち着いて、ギル。それにしても風変わりな事を言っているね、あいつは」

「よもや我の娘をよこせとはな。何がどうしてそうなった、シドゥリ」

「はい。イシュタル様が引き取りを望まれている王女は現在齢二つ。滅多に人が寄り付かないジグラットの奥深くに存在を隠されていた所をこっそり忍び込んだイシュタル様が発見し、見初められたとのことです」

「……それは確かか」

「間違いございません。王女をこのまま引き取ると仰っていたイシュタル様をお止めしたのも私ですから」

ウルクで一番信心深いシドゥリにはイシュタルも少しだけ弱い。シドゥリの懇願と王女の優しさ、あとこっそりジグラットに忍び込んでいたことがバレて焦っていたのもあって、イシュタルは一目惚れしたという王女を渋々シドゥリに託して帰っていった。その後イシュタルはあの通りの様子で王女をよこせと騒ぎ回り、火急の事態だとシドゥリから連絡を受けて久方振りにウルクに帰ってきた放蕩気味の暴君ギルガメッシュと友人のエルキドゥは事の次第を知ったのである。

「まだ乳離れもできているか怪しい年齢ではないか。イシュタルめ、我に敵わんと見て代わりに娘を甚振ろうとでも言うのか」

「多くの男を愛人にしている上に幼女趣味もあったとはね。よりにもよって生贄にギルの娘をよこせだなんて、ギルを馬鹿にしているにもほどがある」

「いえ、それはないかと。イシュタル様は王女を自らの娘にとお望みです」
「……なに？」
「王女は王に瓜二つのお顔立ちで、神々の徴である金の髪と赤い目を継いでおられます。生母たる女性……既に亡くなられておられましたが、彼女に匿われ衰弱していたところをイシュタル様が発見し、私が追いついた頃にはすでに目に入れても痛くないといったご様子で王女を溺愛されていました」
「ギルに似ている上に神の力を継いだ娘？　そんな話は聞いたことがないけれど……」
「ええ、私どもも知りませんでした。なので先に王女についてご報告申し上げてよろしいでしょうか」
「……続けろ」
「では――」
許しを得て、シドゥリは感情を込めず淡々と調査結果を報告し始めた。
曰く、生母は近隣都市からウルク王であるギルガメッシュに捧げられた女の一人だったという。女神から産まれ、特別な力を有しているギルガメッシュと彼が支配するウルクに恭順に近い姿勢を取る都市国家はいくつか存在している。そのうちのひとつから友好関係を示すために見目麗しい女性がギルガメッシュに捧げられるのは珍しいことではなかった。好色な王は一度か二度手を付けると別の女に足を向けてしまうため王の子がいないと判断されれば王以外の人間と縁を結ぶこともできる。しかし件の女性は王の子を身籠っていたためジグラットに留め置かれていた。気鬱な様子ではあるが体調に問題はなく、女性は予定通りの産み月に産気づいた。
「ですが、結果は死産として報告されています」
「その女性が意図的にギルの娘を隠したのかい？」
「はい、おそらくは」
死産が珍しい時代ではないこと、特別な力を有すギルガメッシュの子を成すのは難しいということからその報告を訝しむ者はいなかっ

た。当人であるはずのギルガメッシュでさえそうだったのだから当時の責任者を追及するのは酷というものだ。
「王女が仰るには彼女は魔術の心得があったそうです。出産に立ち会った者たちの記憶を改竄し、自らは王の子を失ったために狂った振りをして人を遠ざけていたと。ウルクから出ることを望んでいたようですがその状態では許可を与えることはできませんので、そのまま王女を隠しながら育てていたようです」
「……」
「直接害するということはなかったようですが王女に対する扱いも愛情に溢れていたとは言いがたく。王女に名を付けることもなく、王女は年齢に対して小柄で痩せており、お体も強くありません」
「……我に不満があるのは構わんが、子を巻き込んでは誹りは免れまい」
　数分前とは打って変わって静かに嘆息するギルガメッシュ。冷酷無比と名高い王だが子どもに対しては比較的寛容な向きがあるせいだろうかとシドゥリは思った。
「今から会えるか」
「急な環境の変化でお疲れなのか熱を出して臥せっておられますので、起きているかは分かりませんが」
「構わぬ」
「体調が悪いようなら僕は遠慮しておこうかな。また元気になったら会わせてくれ」
　遠慮したエルキドゥを置いてギルガメッシュとシドゥリは王女が休んでいる部屋へと向かう。ギルガメッシュの私室にほど近いその部屋の中には、シドゥリの言った通り突然の事態に混乱した王女が熱を出して眠っていた。衛生状態も栄養状態も良くなかった環境から突如として王族らしい豪奢な環境に置かれたストレスもあるのだろう。今まで誰に顧みられることもなく、自らを冷遇する生母としか関わってこなかったためか王女は周りに人がいると落ち着かないようだとシドゥリは語った。そのため室内には看病のための侍女が一人いるだけで、それもギルガメッシュたちが来ると頭を下げて部屋を下

がっていった。
寝台に近づき寝顔を覗く。初めて見る娘にギルガメッシュは赤い瞳を僅かに見張った。自らと同じ髪色、そして寝ていても損なわれない美しい顔。シドゥリや周囲が騒ぐのも納得なほど自分によく似ているとギルガメッシュは頷いた。
「寝ているな」
「はい。ですがだいぶ熱は下がりました」
安堵した口振りでシドゥリが言う。ジグラット内で王女が現在最も懐いているのはシドゥリだ。イシュタルに命じられたこともあり献身的に王女の世話を焼いている。しかし今日は放蕩王とその友人に事の顛末を報告するためにそばを離れざるを得ず、それを不安に感じた王女がぐずって中々寝付かないと連絡を受けたときは大層心が痛んだものだった。
元々浅かった眠りが人の気配と話し声で覚醒していく。王女が薄っすらと目を開き、燃えるように赤い瞳が不思議そうに眼前の人物を捉えた。
「……シドゥリ？」
「はい、シドゥリでございます。お体の具合はいかがでしょうか？」
「へいき……」
掠れた声で呟く王女にシドゥリは困った表情で水の入った杯を差し出した。だが、シドゥリに介助されながら渋々水を飲む王女は数口でもういらないとばかりにプイとそっぽを向いてしまう。病弱な上に小食で、何を差し出しても一口か二口しかお食べにならないと部屋に向かう際にシドゥリが嘆いていたことを思い出す。ギルガメッシュは栄養の足りてない幼い娘をじっと見つめた。
やがて視線に気付いた王女がシドゥリのうしろに立つ男に目を向ける。赤い瞳の視線が交じり合い、王女は目を見開いた。
「……おうさま……？」
「そうだな。そしてお前の父でもある」
「……おとう、さま」
水分を取ったことで目覚めたときより張りが出た声で舌足らずに

父王を呼ぶ。その声にギルガメッシュが頷くと、王女は一瞬固まったあと、嬉しそうに破顔した。
「おとうさま、おとうさま」
「急くな。我は逃げん」
シドゥリの制止も振り切りギルガメッシュに腕を伸ばす。甘えた表情と仕草にギルガメッシュは気付けば寝台から娘を抱き上げていた。
「……」
「おとうさま……？」
「いや。体調はどうだ」
「へいきです」
父の腕の中で嬉しそうに甘える娘にシドゥリの顔も綻ぶ。人見知りの王女が一目で王に懐いたのも、王が王女を娘として認め気遣っているのも喜ばしい。
ギルガメッシュに頬をつつかれて王女が笑い声をあげながら身を捩る。市井にいる親子のようなやりとりをシドゥリは微笑ましそうに見守っていた。

「王よ、そろそろ王女はおやすみになりませんと……」
「む？　……そうだな、あまり無理はさせられぬ」
「……」
「ぬぅ、泣き落としとは傾国の手腕を……明日も来るゆえ今日は休め」
大きな瞳に涙の膜を張る娘にギルガメッシュが呻く。いやいやと首を振って腕を伸ばしてくる娘を宥めて寝台に寝かせ、ギルガメッシュはその頭を撫でた。
「シドゥリ、あとは頼む」
「お任せください」
いくらぐずろうと体は子ども。まだ疲労も回復しきっていない体はたやすく睡魔に侵され、すぐに来た時と同じ寝息を立て始めた。それを確認してギルガメッシュは友人の待つ部屋へと足を向ける。
――我が娘には神を魅了する性質（呪い）があるようだと、ギルガメッシュ

が親友に語るのはすぐのことだった。

第三話

「本当にイシュタルのもとへ行きたいか」
父王の言葉に王女は目を瞬かせた。熱も下がり、この調子であれば明日か明後日にはイシュタルに王女を引き渡すことができると医者は言った。体調不良を盾に猶予を延ばしているがイシュタルの我慢にも限界が近い。その癇癪による被害も増すばかりだ。
「お前が望まぬなら、我の娘をイシュタルめにくれてやる道理はない」
「イシュタルさまのところにいったら、おとうさまにあえない……？」
「それが奴の示した条件の一つだからな」
王女を捧げたのちの接触は許さないとイシュタルは言った。あの強欲な女神らしい言い分ではあるが周囲はその要求に不安を隠し切れないでいた。
愛が多く、一方でそれが冷めたときの残忍さも群を抜いている女神イシュタル。彼女の名声に目が眩み夫となった前王ドゥムジは今や冷や飯を食わされている。それでも生きているだけ僥倖と言えるだろう。人間ながらに一時イシュタルに気に入られた者たちは獣に姿を変えられたり、戯れに命を差し出させられたりとにかく悲惨な目に遭っている。そんな女神のもとに王女を差し出せばどうなるか、すっかり王女の可愛さに魅了されている世話係の者たちは心配で仕方なかった。
「あれはお前が思うより残虐だ。愛が冷めれば殺される」
「……」
「行きたくないのであればそれで良い。我とエルキドゥであの女は黙らせよう」
物理的にな、とギルガメッシュが心の内で呟く。神を魅了する性質を持つこの娘ならばあるいはと思う気持ちもあるが、何よりギルガメッシュ自身が娘を手放すことを快く思っていない。
王女が強い魅了の力を有していることはもはや疑いようがなかった。神性持ちに強く作用するが人間に対しても効果があることもここ数日で確認している。エルキドゥによれば動物にも好かれやすい

とのことなので知性体であれば効果があるのかもしれない。ただその力は万能ではなく、効果としては幼子を見たときに感じる愛情や庇護欲が増すというもの。無条件に愛され続けるわけでもないことは生母の扱いからもよくわかる。だからこそ何かのきっかけで愛情が反転する可能性も十分考えられた。

「……いしゅたるさまは、わるいめがみさま？」

「悪も善も併せてあの女を構成している。だが人間にとって傍迷惑な存在であることに違いはない。飛蝗の群と砂嵐、子供のかんしゃくが混ざったような女だ」

吐き捨てる父に娘はしょんぼりと肩を落とした。父やその友人が何度も語って聞かせたイシュタルの残虐性を娘はいまいち実感できないでいる。あの日あの時、生母に縋って泣くことしかできなかった自分を救ってくれた美しい女神。優しく抱き締め娘とまで呼んでくれた女性が悪い存在だとは思えなかった。

ギルガメッシュは俯く娘の頭を撫でた。自分そっくりの顔立ちで無邪気に懐いてくる娘に絆されている自覚はある。

「あれを理解できる存在などいないだろうが、もしもの時に被害を被るのは他ならぬお前自身。よく考え――」

「ギルガメッシュゥゥ!!　いい加減にしなさいよあんた！　早く私の娘を渡しなさい！」

何の脈絡もなく凄まじい破壊音を響かせて父子のいる部屋の壁が破壊される。土煙が立ち上る中、娘を守るようにギルガメッシュが立ち上がった。剣呑な視線を開いた穴へ向けるとそれに負けない強い視線が返ってくる。煙が晴れたその先から瞳を金色に輝かせたイシュタルが天舟を携えてギルガメッシュを睨み付けていた。

「誰が貴様の娘だ阿呆。さて、今すぐ帰るというのならここを破壊したことは大目に見てやらんこともないが」

「ウルクは私のものなんだからどう扱おうと私の勝手よ！　いいから早く私の娘を――」

「おとうさま……」

イシュタルの言葉に被せるように幼子の声が響く。イシュタルは

その声を聞いて蕩けるような笑みを浮かべたが、視線を向けた瞬間に硬直した。
　ぐすぐすと涙目でギルガメッシュの背に隠れている幼子は間違いなく数日前に見初めた王女だ。しかしその瞳に自身に対する怯えを宿していることに気付いてイシュタルは数秒息ができなくなった。慌ててギルガメッシュの背後に回り込み、小さな体を抱き締める。あまりの素早さにギルガメッシュも反応することができなかった。
「ご、ごめんね、私の愛しい子！　まさかこの部屋にいるとは思わなくて……泣かないで、ね？」
「いしゅたるさま……」
「なぁに、私の可愛い娘。ああ、この前より随分血色が良くなっているわね。安心した」
　目尻を緩ませてイシュタルが呼び掛けに答える。愛しいという感情のままに頬や額に口付けると王女は擽ったそうにしながら笑みを浮かべた。笑顔を近距離で喰らい悶絶しているイシュタルから先ほどまでの怒りはまったく感じられない。
　それを見てギルガメッシュは珍しく驚いていた。父神アヌをはじめ、多くの神々に甘やかされてきたイシュタルは我儘で気分屋で自分の思う通りに事が進まなければ癇癪を起こすような女神だ。腐っても都市神なので人間への愛はあるだろうが、それは神視点のものであり人間という種に対するものだ。気まぐれに個人を気に入ることはあれど「女神である自分が特別に目にかけてやった」という考え方で、当然イシュタルが上の立場の一方的な関係になる。対等など望むべくもなく、気まぐれ以外の理由で人間側の要求をイシュタルが受け入れることなどあり得ないはずだった。
　人どころか神にさえ尊重されて当然、尽くされて当然と考える傲慢な女神。そんな女神が自分の娘には素直に謝り、猫撫で声で機嫌を窺い、あまつさえ体調の心配をしている。衝撃的な出来事にギルガメッシュは驚き固まり、その後は気持ち悪さで総毛立った。
「さあ、貴女が本当に帰るべき場所に帰りましょうね。巫女たちも貴女が来るのを待っているわ」

「疾くその口を閉じよ。我は了承しておらんぞ」
「は、妻子の生死にも頓着してなかったくせに今さら父親面？　これだから責任感のない男って嫌だわ～」
「……貴様」
「なに？　図星突かれて怒りでもした？」
「いしゅたるさま……もうおとうさまにあっちゃだめですか？」
「――――」
一触即発の空気を破ったのはまたも王女だった。今にも泣き出しそうな、哀しそうな声音で問われてイシュタルが言葉に詰まる。たっぷり三十秒は腕の中の王女を見つめ、やがて諦めたようにため息を吐いた。
「……一年に一度くらいなら」
「……」
「そ、そんなに哀しそうな顔をしないで？　なら半年に一度……だ、だめよ、これ以上は……ああっ、泣かないで、泣いた顔も可愛いけれど、せっかくならさっきみたいな笑顔が……」
一人慌てふためくイシュタルにギルガメッシュはいよいよ言葉を失った。あのイシュタルが、傲慢が人間の形を取ったらこうなるだろうという女が、自らの意見を曲げてまで他者の機嫌を取るなど前代未聞だった。
「うう、可愛い娘の頼み事はなんでも叶えてあげたいけれど……ああ、そうだわ！　私の娘、可愛い貴女の名は――メラム」
「！」
哀しそうな顔が驚きに変わり、やがて喜びに満たされる。その表情にイシュタルも頬を緩ませて王女の髪を撫でた。
「気に入ってくれてよかったわ。私の可愛い子」
柔らかく、慈しみに満ちた声音で幼子に話しかける姿。それはまるで、と考えたところでギルガメッシュはかぶりを振った。イシュタルが付けてくれると言ったからとギルガメッシュに名付けられることを拒んだ娘は幸せそうにはにかんでいる。
――あらゆる未来を見通す赤い目が、一瞬だけ見開かれた。

「……おい、イシュタル」
嘆息しながらギルガメッシュはイシュタルへと言葉を掛けた。つい先日求婚してきたときの表情はどこにいったのか、今は娘との時間を邪魔するなという敵意満載の視線を向けられる。いっそ清々しいまでの変わり身の早さにギルガメッシュも一周回って愉快な気持ちになった。
「我の出す条件で誓約を交わすというのなら認めてやらんこともない」
「……とりあえず、聞きましょうか」
怒りを押し殺したような声と表情でイシュタルが言う。感情を爆発させない理由はただひとつ、メラムと名付けた娘に怖がられたくないためだ。腕の中できょとんと両者のやりとりを見つめる娘を、ことさら優しくイシュタルは抱え直した。
そうして、ギルガメッシュはいくつかの条件を突き付けて娘を都市神に捧げることに同意した。
不自由なく生活させること、心身を害することを禁じること、愛が覚めたときは即刻ギルガメッシュに身柄を引き渡すこと、三ヶ月に一度はギルガメッシュと過ごす時間を設けること。母親の真似事をしたいらしい女神はどの条件にも不満げで、特に面会の期間については娘がいなかったら間違いなく殺し合いに発展していたとギルガメッシュはのちにエルキドゥに語った。最終的には神殺しの宝具をチラつかせるギルガメッシュと、王女の涙目に負けたイシュタルが折れて決着がついた。
「いしゅたるさま……？」
「なんでもないわ。ああ、ようやく可愛い貴女を私のものにできるのね」
ギルガメッシュと誓約を交わす間も不満げだったイシュタルだが、娘に接するときだけはそれを微塵も感じさせなかった。緊張が切れ、殺伐とした空気のなくなった部屋で王女がうとうとと船を漕ぐ。その様子に目尻を緩めてイシュタルは優しくその頭を撫でた。

第四話

「困ったわ……」

沈んだ声音でイシュタルは呟いた。視線の先には自らの腕に包まれてくうくうと寝息を立てている最愛の娘がいる。紆余曲折あったが無事に父親であるギルガメッシュから取り返すことができた愛娘だ。体調が落ち着くまでジグラットで静養している間にウルクにあるイシュタル（エ・ア・ン・ナ）の神殿の準備を整え、万全の体勢で娘との生活を開始させた。この幸福の前ではギルガメッシュの不敬も笑って流せるというものだ。

幼い娘のために設えた部屋の中、邪魔者のいない空間で自身の腕の中にある安らかな寝顔にイシュタルは胸をときめかせる。しかしすぐに美しい顔貌を曇らせ深く溜め息を吐いた。

「まさかここまで小食だったなんて。このままでは倒れてしまうわ」

シドゥリから報告はされていたものの実際に目にするまでは気にしていなかったこと。何を差し出しても一口二口でやめてしまい、食べるのに飽きて食事が続かない。水分さえあまり摂りたがらない娘の偏食さにイシュタルは頭を悩ませていた。幼児期にこの調子では今後が不安だ。ただでさえ体が強くないのに、とイシュタルは気を揉んでいた。

巫女たちにも相談し、興味のありそうなものを与えたり量に気をつけながら甘いものを与えたりしても効果はなかった。イシュタルに捧げられる今年一番に甘い果実を分けたときは三口ほど食べたが、それきり口を閉ざしてしまったので胃の許容量が少ないのかもしれない。もしくは今まで食べていなかったから消化管が発達していないのか。いずれにせよ無理に食べさせると逆効果になり得ると言われ、イシュタルはやきもきしながら娘の食育に思考を巡らせていた。

「んむ……？」

「まあ。起きたのね、私の可愛い子」

甘い甘い声音でイシュタルが言い、そのままぷっくりとした唇に吸い付いた。頬や額にも唇を落とし自らの頬を擦り寄せる。寝起きの

娘は擽ったそうにイシュタルの行動を受け入れていた。
　イシュタルの王女に対する溺愛についてはウルクを越えてメソポタミア全土で知られるところとなっていた。だが、件の王女の姿を見たことのある者はほとんどいない。イシュタルが深く信頼を寄せる数人の巫女を王女の世話係とし、エアンナの外に連れ出すこともしないためだ。イシュタルの独占欲の強さゆえだろうと誰も何も言わず、人見知りな娘のためにイシュタルが配慮していることは誰も気付かなかった。
「お腹空いた？　何か食べる？」
「んん……やぁ……」
　昼寝から目覚めたばかりの娘に尋ねても嫌々と首を振られてしまう。せめて水だけでも、と杯を口に近付けても逃げるように顔を背けられてしまった。心底困った表情でイシュタルは愛しい娘をあやす。ゆっくり腕を揺らし、背中を一定のリズムで優しく叩くと機嫌が直ったのか愛らしい笑顔をイシュタルへと向けた。
「いしゅたるさまぁ」
「なぁに、私の宝物」
　きゃっきゃと腕を伸ばしてくる娘の手に人差し指を添える。ふっくらとした小さな手のひらがその指を握り込む力はあまりに儚く、イシュタルの庇護欲と母性を擽るには充分すぎた。愛しさで息が詰まるのはもう何度目だろうか。
　だからこそ健康に育ってほしいと願っている。神の徴を宿してはいるが三分の二は人間であり食事も睡眠も人と同等に必要な娘。怪我も病気も怖い。それらを防ぐためにも必要な栄養は摂らせなければならなかった。
「ねえ、私の愛しい子」
「？」
「今まで食べたものの中で一番好きなものを教えてくれる？」
「……」
　食事という行為が嫌いなのか、今まで食べてきた食品が気に入らないのかも判然としない状態で焦りすぎは禁物だ。まずは情報を集め

ようとイシュタルは思った。
女神の問いに娘は一度口を開いたが、何かを言い淀むとそのまま閉ざしてしまった。イシュタルが先を促しても唸るばかりでどこか申し訳なさそうに首を力なく横に振っている。この行動が何を指すのかイシュタルはよく分かっていた。イシュタルの溺愛や巫女に世話を焼かれることを遠慮した時の顔だ。神殿に来た当初、当然といえば当然だが戸惑いや不安からか王女は周囲に遠慮がちだった。それから二週間ほど経過し、傍から離れることが稀なくらいべったり付き添っているイシュタルには甘えを見せるようにもなってきたが、世話係の巫女に対してはまだまだ距離を取っている。最も懐いているだろうイシュタルにさえ好物を言うことを遠慮してしまっているのかと思い至り、イシュタルは胸を痛めた。
「遠慮しないで。何を言っても怒ったりしないから」
「……」
「可愛い娘のことを知りたいだけよ」
「……ぃ」
「え？」
「おっぱい……」
「……おっぱい」
まだ二歳の幼児がそれを求める事はなんら間違っていないのだろう。そして子を産んだ女性にしか出せないものを求めることに遠慮してしまうのも。ジグラットで出会った日以外、イシュタルは生母の話を一切しない。ギルガメッシュもシドゥリも一通りの事情を聞いてからはその話に触れなくなった。だから生母を想起させるような話はしないほうがいいのだろうと、王女は幼いながらに気を遣っていた。
疎まれていたことも愛情が向けられていないことも王女は察していた。それでも接する相手が母親しかいない環境で心の支えにできたのは彼女がたまに見せた優しさだけだった。優しく髪を撫でてくれたとき、自分を慈しむように見ていたとき、寝たふりをした自分に謝罪を繰り返していたとき。そのすべてで生母は王女をその胸に掻

き抱いていた。そうした理由から王女は柔らかな胸に甘えることが一等好きで、それが食の好みにも多分に影響している。半神たる娘は自我の確立も早く、生母の胸に吸い付いていた時期が最も幸福だったと覚えていることも理由のひとつだ。

言葉にしてしまったせいで我慢していた恋しさが溢れ出す。今にも泣き出しそうなほどに顔を歪ませながら、けれどイシュタルの手前それを必死に堪えようとする。そのいじらしく健気な姿を目の当たりにしてイシュタルは堪らず娘を自分の胸に抱き寄せた。

「好きなだけ甘えていいのよ。……乳は出ないけれど、貴女の慰めになるのなら」

自らの豊満な胸に顔を埋める娘の髪を撫でる。もともと全裸になることも厭わないイシュタルの胸は薄い布一枚のみで覆われている。外に出るなら話は別だが神殿内で娘と触れ合う時間に貴金属を挟むなどあり得ない。おずおずと、けれどしっかりと額をすり寄せてくる様子にイシュタルはほっと息を吐いた。これで幾ばくでも寂しさが紛れるなら喜ばしい。

やがて柔らかな感触の中で娘が再び微睡み始める。その横顔が今までで一番安らいでいることに気づいてイシュタルも嬉しくなった。

「どうしたの？　ふふ、くすぐったいわ」

半分夢の中にいるであろう娘がもぞもぞとみじろぐ。落ち着く位置を探しているのだろうと優しい瞳でそれを見遣り、起こさないように優しく背を叩いた。

「――――」

「おかあさま……」

繰り返しになるが、イシュタルの胸は薄布一枚でしか覆われていない。

だから、寝惚けた娘が布を押し上げそれに吸い付いてしまうことも容易だった。

「……」

ちゅうちゅうと突起に吸い付く娘をしげしげと見つめる。さすがのイシュタルにとっても事の衝撃が大きく背を叩いていた手は止

まっていた。ここまで胸が好きだったとは知らなかったし、生母と重ねられていることには苛立ちのまま荒れてしまいそうなくらい面白くない。

――だが、だがである。それはそれとして、この状況はあまりにもイシュタルの母性を刺激した。

自分の胸を一心に吸って甘えてくる娘をどうして愛しく思わないでいられるだろう。母を求めての行為をこの自分にしているのだと思うと歓喜に打ち震えた。もうどうしようもないほどの愛おしさしかイシュタルの胸には残っていなかった。

これからはより胸を露出しやすい服を纏おうと心に決め、イシュタルは愛しい娘が完全に寝入るまで胸を吸わせ続けた。

第五話

「ああ……かわいいわ、本当にかわいい。私の娘……」

愛おしさを詰め込んだ声でイシュタルは呟いた。緩みきった目は自らの胸に吸い付く娘に向けられていて、普段は気に入らないものを破壊する弓を撃つ腕は娘を優しく包み込んでいる。相好を崩して愛娘を溺愛するイシュタルの姿は世話係の巫女たちにとって見慣れつつあるものになっていた。

「あの、イシュタル様……」

「なにかしら？」

王女の世話係に任命された巫女はみな信仰篤く、イシュタルのためなら命を投げ出すことも厭わない者たちだ。イシュタルが王女を自らの娘とすると触れ回ったときもイシュタルが望むならばと率先して迎え入れる準備をし、世話係に任じられたときは誠心誠意王女に仕える決意をした。

だが、信心深い巫女でも予想外なことに、イシュタルは娘の世話を手ずから行いたがった。愛でたい時に愛でるだけではなく、日々の世話——食事を与え、体を清め、さらには排泄の世話までイシュタル自身が行うと言った。まだ一人で行動できる年齢ではない王女が排泄をするたびにイシュタルはそれを清め、優しくあやす。目が離せる年齢ではないのもあってイシュタルはとにかく王女にべったりだ。これまでは天上の世界にいることも多かったイシュタルだが王女を引き取ってからはウルクに留まり続けている。都市神がウルクの神殿に留まり子育てをしていることを巫女たちは誇りに思い、一層職務に励むようになった。そのおかげで王女可愛さで破壊性が落ち着いていたイシュタルの機嫌はさらに良くなり、最近はイシュタルの癇癪による被害を聞くこともない。

数日で飽きるかもしれないという危惧もあったがすでにイシュタルは一ヶ月近くこの生活を続けている。王女への愛も減るどころか増える一方だ。その甲斐あって人見知りの王女はイシュタルにだけは肩の力を抜いて甘えるようになり、最近では信心深い巫女ですら驚

愕する行為をするまでになっていた。
「王女は、その」
「ああ。胸に甘えるのが好きみたいなのよ。可愛いでしょう？」
そんなことは知っている。王女がちゅうちゅうとイシュタルの胸に吸い付いている姿を初めて目にした時は世話係の巫女たちの間で激震が走った。今でこそ動揺することはなくなったが初見のときはその衝撃的な姿に全員が二度見をしていたくらいだ。
だが、慣れてきたのも束の間、数日前から世話係の間である噂が立ちはじめている。その真相を明らかにするために巫女長はイシュタルに不敬を覚悟で伺いを立てていた。
「イシュタル様の美しさとメラム様の愛らしさがあわさり、まさに金星の如く輝いておられます」
「そうでしょう、そうでしょう。私が美しいのは当然のことだけど、この子が愛らしいのもまた当然のこと。なんと言っても私の娘だもの」
「仰る通りでございます」
美の女神でもあるイシュタルはその美貌を褒められることを喜ぶ。別の人を褒めるときは「イシュタルがより美しい」ことを前提にしていなければ荒れることは間違いない。だというのに娘と称する王女にだけは自分と同等の賛美を求め、イシュタル自身も惜しみない賛辞を娘に贈る。巫女にとっても目を剥く出来事だった。
巫女長に称賛されたことで鼻高々なイシュタルの機嫌は良い。しかしこのまま愛娘との触れ合いの時間を意味なく阻害してしまえば間違いなくイシュタルの怒りを買う。巫女長は覚悟を決めて本題に切り込んだ。
「その、イシュタル様。もしや授乳をしておられるのでしょうか……？」
「……できたらとは思うけれど、無理でしょう」
剣呑な視線に晒されて巫女長の身が竦む。イシュタルに王女の実両親の話題は鬼門である、ということは世話係の巫女の間で共有されている。一転して不機嫌そうに吐き捨てたイシュタルにそれでも巫女長は言葉を続けた。

「ですが、その、王女は何か飲んでいらっしゃるようなご様子なのですが……」
「……え？」
　巫女長の言葉にイシュタルが目を瞬かせる。胸に吸い付く娘の喉に視線を向けてみると確かに何か嚥下しているような動きがあった。唾液を飲んでいるにしては間隔が早く、指摘されてみればただ甘えているにしては執着が強いような気もした。
「……可愛い私の娘、ちょっと口を開けてみてくれる？」
「？」
「ええ、ありがとう。素直で可愛い良い子ね。……うん、もういいわ、大丈夫」
　ありがとう、可愛いという言葉を繰り返してイシュタルは王女をあやし始めた。やがて王女が再び胸を吸い始めたのを確認したイシュタルはどこか澄んだ瞳で巫女長を見つめている。恐々としながら巫女長はイシュタルの言葉を待った。
「出てたわ」
「……左様でございますか」
「私にこんな権能もあったのね……はあ、ますます愛おしくなってしまうわ……」
　今までも甘かった声音がことさら甘くなる。一心に母乳を求めている王女に母心を募らせたらしいイシュタルは顔が蕩けるほど幸福そうな表情をしていた。
　豊穣や美、戦など様々なものを司っているイシュタルの権能は多岐に渡る。イシュタルの豊穣の神性は在るものを発展させる側面が強く、子を産み育てることを守護するのはニンフルサグ神だったが、ニンフルサグが自らの神性をイシュタルに譲渡してからこれらは同一視されるようになっている。今回の件でイシュタルは女性性よりも母性が強く表出されるようになったのかもしれないと巫女長は思った。
　とかく、神とは人智を越えた存在であり、その行為や理不尽さをヒトが理解することは不可能だ。巫女長も事実だけを確認してイシュ

タルから視線を逸らし、考えることをやめた。現実逃避では決してない。
「そう……なら、最近調子が良さそうにしていたのは」
「はい、イシュタル様のおかげかと」
「……ああ、もう、本当に……この子は……」
満足したのか胸から口を離し、イシュタルを見上げて笑う王女。その表情はとても元気そうで、神殿に来てからまともな食事を摂っていない幼児の浮かべられるものではなかった。少食で偏食な王女の体重は増えるどころか減らさないようにすることが精一杯であり、イシュタルも巫女も随分気を揉んでいた。
だが、最近になって食事の量は変わっていないにも関わらず体重が安定しはじめた。イシュタルにも理由はわからないらしく、喜びつつも一体なぜだろうと不思議に思った巫女たちはそれまで以上に王女の様子を見守ることにした。この点に関しては子育て経験などあるはずもない女神よりも人間の巫女たちの方が適役だ。そうして数日観察をした結果、
体重が安定した時期とイシュタルの胸に吸い付きはじめた時期が一致しているのではないかという意見が出た。まさか、と誰しもが思ったが、一度生まれた疑念はなかなか消えてくれない。日を追うごとに荒唐無稽に思えた疑惑が確信に近いものへと変化していったこともあり、ついにイシュタルへ確認することとなったのである。
信頼する者へ向ける無邪気な笑顔は事実を知ったイシュタルの胸を明確に射抜いた。愛おしさで満ちた感情の赴くままに王女を抱き上げその顔中に優しく口付けを落とす。けれど、足りない。どれだけ愛を注いでも注ぎ足りない。とめどなく溢れる愛情を留めることができず、イシュタルはその口を開いた。
「天の女主人（私の）の最愛の娘。貴女には私の最大の加護を与えるわ。私を信仰することは貴女を敬うことと同義であり、貴女に逆らうことは私に逆らうことと同義。貴女を侵すすべてを私は赦さない。私の最愛は常に貴女にあるわ――メラム」
ごくり、と巫女長は息を飲んだ。イシュタルの放った言葉の重大さ

に体が強張る。神が気に入った人間に対し加護を与えたり力の一部を貸し与えたりすることは稀ではあるが珍しい話ではない。だが、今のイシュタルの発言はその範疇に収まらない。自らが一等優れていると疑わないイシュタルが王女は自分と同等の存在であり、仇為す者はイシュタル自身が討つとまで断言した。移り気な女神だが娘に対する愛は不変であり最大であるとも公言した。これから先、王女の扱い一つでイシュタルの機嫌が左右されることは間違いない。

「今の言葉を徹底させなさい。神殿内だけではなくウルク中に……いいえ、メソポタミア全土に知らしめるように」

「仰せの通りに」

深く深く頭を垂れ、巫女長はイシュタルと王女の前から辞した。部屋の外に待機していた世話係の巫女にイシュタルの言葉をそのまま伝え、まずは他の巫女たちに周知を徹底させるように命じる。驚きで目を見開く部下に急ぐように告げ、自分は王権を司り、王女の実父でもあるギルガメッシュへ送る粘土板を作成する。王政の中にあって王権を司る王と都市神を優先する巫女所は仲が良いとは言い難いが、今回の一件から多少の歩み寄りをお互い見せるようになっていた。巫女長にとっては意外なことにギルガメッシュからは頻繁に王女の近況報告を要求する連絡や王女への贈り物が届けられいる。存外子煩悩な男なのかと見直し、その要求にはできるだけ応えていた。

イシュタルの言葉を一字一句違えぬように粘土板を作り上げ、急いでギルガメッシュに届けるように指示を飛ばす。間違いなく荒れるだろうなと遠い目をしながら、巫女長はイシュタルと王女の世話に戻るべく再び歩き出した。